

父が娘に語った大阪大空襲

小田なら

父・小田実の書斎には、大きな煙が上がる市街地を上空から撮った白黒写真のコピーがあった。この写真は1945年6月の大阪大空襲の上空写真であり、ニューヨーク・タイムスに当時掲載された記事が父が数十年後に探し出したものだった。私の記憶が正しければ、どこかの時点で記事の拡大コピーをうまく張り合わせて大きな額縁に入れるよう、父が母に頼んでいたものだった。

毎年、8月14日前後に父はこの写真を携えて市民運動の集会（市民の意見30・関西）で大阪大空襲を起点とした話をしてきた。なぜ、ポツダム宣言の受諾を決めていたにもかかわらず、8月14日に1トン爆弾を使うような大空襲を受けたのか。同じ日のニューヨーク・タイムスで日本の敗戦を報ずる記事を父が後年見つけ出したときの憤りと怒りとともに、自らの空襲体験を語っていた。

私は幼いころ、さまざまな集会（父が中心となっていたものもあれば、招待されていたものもあった）に連れていかれた記憶がある。

とりわけ阪神・淡路大震災以降の被災者の生活再建をめぐる市民議員立法に関する集会と8月の大阪大空襲に関する集会是、「来るか？」と必ず聞かれていたように思う。参加しないと答えた時にはそれ相応の理由付けが求められたこと、私自身も関心があったことから、学生時代の参加頻度もそこまで低くなかったはずである。そのころには父の話の現代的意味を理解しはじめた（という気になっていた）こともあり、いま記憶している父の空襲体験のほとんどはそうした「大人向け」の話であり、戦争や植民地化といった構造的問題にまで続く話であった。

父が1945年8月14日の空襲をどのように生き延びたのか一言いければ、個人史としての体験―は、実はあまり聞かされていない。いまとなつては悔やまれるが、父があまり少年時代について話したくなさそうに見える、深く聞く勇気を出せなかったのである。また、父がいつも噴出する社会的問題について家族の食卓で母と議論して

いたのを見て、少年時代の個人的体験を聞けるように思えなかったのかもしれない。「大人向け」に大阪大空襲の話をしているときの父からは、いつも「怒り」を感じていた。「殺し、焼き、奪う」ことを続けた結果「殺され、焼かれ、奪われ」、ふつうの人々が巻き込まれたことへの怒り。現代までなぜ「難死」責任が問われていないのか、犠牲者は救済されないのか、世界中でその歴史を終わらせられないのか、という憤りや焦りである。

大阪市の桃谷駅近くにあった父の実家では、戦時中、防空壕を兄と掘ったと聞いている。ただし、それは簡易的にトタンを渡したような「ちゃちい」ものであり、家族で何とかしなければいけなかった。一方、「大人向け」の話では、ドイツの場合には公共の場にしっかりとした防空壕をつくっていたことを引き合いに出し、父は怒っていた。こうした話を聞いた当時の私は（おそらく義務教育を受けていた時期だったと思う）、なぜ父が憤りを感じていたのかを分かっていた。学校で知る「防空壕づくり」のエピソードは、すべて自分たちで何とか対応しているものであったため、知らず知らずのうち、非常に自助努力を求められつつも補償もされないという日本社会の空気に染まっていたようである。このことを

面と向かって父と話したことはなかったが、自然災害の被災者への公的支援法成立に向けた運動にかかわる場に連れ出してくれたのは、父による無言の教育だったのかもしれない。

父は、少年時代の個人的体験を家族に（少なくとも子どもに）語ることはほぼなかったが、その体験をもとに書いた自身の小説がある。父は本を出版するたびに母と私に（中学生の頃から）一冊ずつ渡してくれていた。2003年に出版された『子供たちの戦争』では、扉のページに私へのメッセージを残している。

ならへ。アッパ（父のことである）は、大きく言って、このような子ども時代を通過して生きた。この一冊をお前に。

『子供たちの戦争』はフイクションでありつつも、父のメッセージのとおり、子ども時代の体験が投影されたものだったのだろう。いま、私が「大人」

の立場になってから読み直すと、当時の無邪気な子どもたちが生きる戦時下の社会の残酷

さや恐ろしさが一層胸をつく。

父には長らく（おそらく亡くなるまで）五感すべてに空襲体験が染みついていたと思われる。何かが発火したニュースを見たときだっただろうか、何よりも爆風が猛烈で凄まじいと教えてくれた。空襲や爆発に遭ったときには頭だけでなく、目・耳・鼻すべてを指でしっかりと押さえなければならぬのだと、そのやり方を見せてくれもした。食料不足の少年の身体が爆風や振動を全身で受けていた衝撃はいかほどだろうか、いまとなつては考えさせられる。

何より、父のなかでは空襲での「におい」の記憶が強烈だったようだ。空襲で物が焼ける臭いではなく、死体や死体が焼けるにおい、あるいは、それらが長らく放置されたにおいである。空襲のあとのこうしたにおいは、「鮭の缶詰」に似ているらしい。食べ物好き嫌いが無い父でさえ「これだけ

は無理だ」と言っていたことが思い出される。その体験からか、空襲にとどまらず、なにごとくも、もつとも想像しにくいものが「におい」だと言っていた。さらに、視覚・聴覚的な体験を享受できる技術が進歩しても、「におい」の再現は難しいだろうと語ってもいた。

父は、常に自身の小さな体験と「大人向け」の構造的な問題とを往還させながら思考を積み重ねていた。そうした姿は、子どもから見れば、非常に強く頼もしいものであった。しかし、いまこうして『子供たちの戦争』とともに父から聞いた体験をふり返ってみると、違った印象を受ける。当時彼が全身で受けた傷は、子どものころの私が想像したよりももっと深いものだったのではなからうか、と。

（おだ・なら／大学教員、写真提供も筆者）

帝銀事件と日本軍の秘密戦部隊

占領政策の分岐点

はじめに：帝銀事件捜査から見えてくるもの

帝銀事件は、その事件の残酷性とミス터리性、そして冤罪、未曾有の人権侵害と

山田 朗

いう観点から長年にわたって論じられてきた。私は、当時捜査にあたった警視庁捜査一課の係長・甲斐文助の捜査手記の分析した『帝銀事件と日本の秘密戦』（新日本出版社

